

# 麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 助教

氏名 石田大歩

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

## 1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

我が国における家畜伝染病の蔓延予防に資する人材を育成することを責務と考えている。そのために、家畜や家禽の伝染病の病原体や発生状況、診断方法、予防方法について正しい知識を身に付け、基本的な衛生観念を習得するとともに、獣医師としての使命を自覚出来るような教育を実施している。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
牧場実習	獣医学科	必修	2	136
家畜衛生学Ⅱ	獣医学科	必修	4	140
家畜衛生学実習	獣医学科	必修	4	140
家畜伝染病学Ⅰ	獣医学科	必修	4	139
家畜伝染病学Ⅱ	獣医学科	必修	4	140
家禽疾病学	獣医学科	必修	4	139
家畜伝染病学実習	獣医学科	必修	5	130
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	2
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	2
卒業論文	獣医学科	必修	6	2
動物衛生学	動物応用科学科	必修	4	156

## 2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

1992年に我が国における豚熱の清浄化宣言がなされてから30年が経ち、遺憾なことに再び豚熱が発生、猛威を振るい、再清浄化には数十年はかかると言われている。またかつては、一生涯に一回対応するかしないかという程度の発生頻度であった高病原性鳥インフルエンザウイルスも、今では毎シーズン発生が見られている。このような経緯から、数十年単位で我が国における家畜伝染病の蔓延防止を担うための新しい獣医師の育成が獣医大学には求められており、これらの問題に対して問題意識を持ち、獣医師としての使命を実感出来る学生を育てることを理想とする。そこで、このような教育の要でもある家畜伝染病学や家禽疾病学を通して、現場で求められている獣医師像を共有すると共に、若い獣医師が家畜伝染病の蔓延防止に奮戦しなければ、我が国の畜産の将来が危ういということを実感してもらえようような教育を実施していきたいと考えている。

### 3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

これまでの教育において、まずなにより、学生が日本で問題となっている家畜伝染病の状況について把握し、いかにこの学問を学び、これらの家畜伝染病についての知識を身に付けることが重要かを理解してもらうために、現状の発生状況と被害の大きさについて説明することを心掛けている。また、家畜伝染病の診断や予防のために必要な、病理学などの関連科目と絡めながら解説することで、国家試験や将来現場で役に立つ応用力を見つけることが出来る教育に重きを置いている。

獣医学だけではなく、学問において、最も優先すべきことは、どのような形であれ学生が勉学に向き合い、理解し、知識を覚えてくれることである。そのため、私の講義では、例えば病原体の学名の由来を解説し、臨床所見の画像を多用することで、イメージと用語をリンクさせ、記憶として定着させるための材料を提供することを心掛けている。

実習や卒論研究の指導においては、まずなによりも、学生の安全を考え、学生自身が病原体を取り扱う上で、自分や周りの身を守るための基本的な考え方や行動を理解するための指導を心掛けており、この点においては、しつこいほど厳しい注意喚起を行っている。その上で、実習や実験における失敗は咎めず、一緒にトラブルシューティングを行い、良い結果が出れば共に喜び合うことで、学生に学問や研究の楽しさを実感してもらい、自らの能力を向上させていく意欲を育てていくことに重点をおいている。

#### (1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

- ・毎回の授業で小テストを実施し、学生自身が理解度を把握できるようにする。
- ・実習では出席を取る際に、個別の口頭試問を行い、実施した手技の手順や注意点を自分の言葉で説明させることで、記憶の定着及び言語化の訓練を行っている。

#### (2) ICTの教育活用

有

試験やレポートの提出にAzamoodleを利用する。

## 4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

教育の相違工夫においては、学生が理解し、記憶に定着しやすいように心がけており、学生からの評判も良い。実習のレポートは、様式を統一し、学生がレポートを作成しやすく、且つ、自分で調べるべき要点が項目として明瞭になるようにしている。

### (2) 学生の理解度の把握

A

試験及びレポート、また出欠を取る際に個別の質問を問うことで、学生の理解度を把握を行っている。

### (3) 学生の自学自習を促す工夫

A

実習では、事前に予習用講義動画をアップロードし、学生が予習復習を行えるようにしている。また、レポート課題として、国家試験に即したオリジナル問題を作成することで、問題の出題形式や頻出問題になりやすい箇所の理解・把握を促している。

### (4) 学生とのコミュニケーション

A

学生からの質問は随時受け付けており、メールでも対面でも時間を取り、丁寧な対応を心掛けている。今後も気楽に質問をしてもらうために声掛けを実施していく。

### (5) 双方向授業への工夫

C

獣医学分野の科目は記憶してもらう知識の分量が多く、無暗に双方向授業を展開してしまうと、解説に必要な時間が不足してしまう。実習では、各自が操作をしている時や出欠時に学生からの意見や感想を積極的に聴取するように心がけている。

### (6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

総合獣医学の本試験における、研究室に所属する6年生すべての分野別得点率を確認し、その他の学生の平均得点率と比べることで、各学生に対して、どの科目・分野において獲得点数を上げる余地が残されているかを個別にアドバイスした。

## 5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

事前動画資料による予習、実習の時間効率化、質問のしやすい環境に良いコメントを頂いていたので、今年度も引き続き、同様に実施した。

### (2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

昨年と同じ感触で、受講学生からは実習時間の短縮や説明が丁寧である点、質問がしやすいなどのコメントを頂いている。

### (3) (2)を踏まえた次年度の取組

今年度は実習実施最終日までに授業評価アンケートのURLを発行して頂けたため、昨年度よりも多くの学生の評価を集めることが出来たので、来年度の改善に活かしたい。

## 6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

良い勉学の基本は反復学習だと考えているため、授業内での反芻は勿論、予習や復習項目を課すことで反復回数を増やしていきたい。研究室での研究指導では失敗を恐れず、楽しみながら卒論研究を実施してもらうことを心掛けている。

### (2) (1)の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

研究室所属学生が研究成果を日本獣医学会学術集会で発表した。

## 7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

FD研修の参加は義務だと捉えているので基本的に参加している。

## 8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

短期的には、国家試験合格率向上を目標に、試験対策力のより強い教育にアップデートしていきたいと考えている。また長期的には、当該科目に限らず分野横断的協力を伴った教育を展開すると共に、我が国の家畜伝染病対策に奮戦する獣医師を多数輩出する教育に取り組んでいきたい。

## 9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

Ishida, H., Nakamura, M., Murakami, H., Kazama, K., Oba, M., Takemae, H., Mizutani, T., Ouchi, Y., Kawakami, J., Tsuzuku, S., & Nagai, M. (2024). Detection and genetic analysis of bovine rhinitis B virus in Japan. *Archives of virology*, 169(6), 125.

<https://doi.org/10.1007/s00705-024-06046-y>